

ひとひと
ともに担い、ともに築く女と男の情報誌



ねっとわあく

No.42

特集

インターネットで もう一つの世界が広がる — エンパワーメントの手段として —

● P4~5 ネット・コミュニティー

非営利組織「WOM」
女性たちのために発信したいと
ネット・コミュニティーづくり

● P6~7 パソコンとシニア

NPO法人「花咲ネットの会」
シニアがシニアの立場に立った
パソコン指導と仲間づくり

● P8~9 SOHO

志村 英二さん・あゆみさん
多様化するワークスタイル
SOHO。私たちは…

● P10~11 ネットショップ

北極しろくま堂店主 園田 正世さん
ホームページにメッセージを込めて

● P12 インターネットを体験したい方へ

● P13 本の紹介

● P14~15 あざれあからのお知らせ

● P2~3 船橋 邦子さん

あふれ出す情報と広がる可能性
味方になるかはあなた次第

インターネットで

もう一つの世界が広がる

—エンパワーメントの手段として

日本のインターネット人口は、2002年末には5000万人を超え、アメリカに次いで世界第2位。

2世帯に1世帯の割合でインターネットへ接続しているという報告もあり、一般家庭への普及も進んでいる。

実感が伴わないながらも、インターネットは、速度を増してその世界を広げている。一過性のブームや単なる通信手段が増えたというレベルではない「もう一つの新しい社会」の出現。特に女性のエンパワーメントにどうつながっていくのかを、静岡県内で活躍する人たちを中心に取材をし、その可能性を探ってみた。

女性学研究者

船橋 邦子さん



女性の社会参画を求めて、長年にわたりNGOの活動に携わる。
一九九四年 佐賀県立女性センター・県立生涯学習センター初代館長
一九九六年～二〇〇一年 大阪女子大学女性学研究センター教授
二〇〇三年四月から和光大学教授

私たちは、パソコンやインターネットと向き合うときに、どうしても「いかに使いこなすか」という部分に傾倒しがちです。しかし、単にノウハウを得るだけでよいのでしょうか。何に対して一番敏感でなければいけないのか、どうかかわっていけばよいのか、それらを通じてどのようにエンパワーできるのかを、女性学の視点から船橋邦子さんに聞きました。

あふれ出す情報と広がる可能性 味方になるかはあなた次第

—最初に、インターネットで女性はエンパワー（力をつけること）ができると思われませんか？

答はイエスでしょうね。女性が、政治的にも文化的にも社会的にも、均等な機会を享受できる一つのツール（道具）が出現しました。デメリットも確かにありますが、それ以上にメリットの方が大きいと思われます。私が住む千葉県では「千葉県男女平等条例ネットワーク」というホームページが開設され、男女共同参画に関する意見交換の場が設けられました。知事へのメールも発信でき署名用紙なども簡単にダウンロード（入手）できます。柏市では、情報提供・相談・学習機能を備えた女性センターがインターネット上に設立されて、市民によるNPO法人が運営を担っています。このようにどんどん女性たちの可能性や活躍の場が広がっています。

広がる活動範囲

インターネットによって、先生自身の研究や活動は変わりましたか？

それは、ものすごく変わりましたよ。

私自身、インターネットやメールを使い出して五年ぐらいでしょうか。今やこれがないと仕事にならないといったも過言ではないですね。一番助かっているのは、情報の伝達。周りは、みんな忙しい研究者ばかりなので、なかなかつかまらないんです。それが、今ではメールによって一斉に連絡が行き渡りますから。日本女性学会の編集責任者もしていますが、原稿の依頼や集約も本当に楽になりました。

インターネットの利点はどんなところにあると思われますか？

先ほどの実務的なことに加えて、人的ネットワークの形成や情報の共有化が容易に図れることでしょ。また、男性と同等な情報を享受できることもメリットですね。

政策決定に関していえば、一般市民が行政施策や議会の議事録などの情報を、ネット上から手軽に入手できるようになってきました。以前よりは、市民と行政が対等なパートナーシップを築きやすい環境に変わりつつあるといえるでしょう。ま、これから行政側が努めて情報を公開してくれないと実現できないことですね。

さらに、情報が簡単に国境を越えられるので、平和の意思表示や世界的に起こっていることに関して、グローバルに行動ができる点も見逃せません。広域な人の意見が聞けて、活動範囲が広がることにつながっています。

触れなければ前進しない

では、マイナス面は？

やはり、相手の顔が見えないということですね。お互いの反応が100%伝わり合うわけではありませんから。私自身、個人的なことや特に感情を伴うことは、メールに頼らず、できるだけ会って話すようにしています。また、メールの着信画面は表示が画一的なので、メリハリがないんですね。パッと見て緊急の要件がわかりづらく優先順位がつけにくいという点があげられます。それが、忙しい身にとっては、少し辛いですね。

しかし、それ以上に気を配っていかなければならぬのは、インターネットがこれだけ普及したといっても、世界の人口でいえば、まだわずか数パーセントの人にしか使われていないという現実。一般的に「デジタルデバイス」(情報格差)と言われていますが、情報を享受できる人とできない人の格差が、これからますます広がっていくことでしょう。まだまだ女性のほうが男性に比べて、パソコンに触れられる

機会が少ないですから、そのあたりの解決策を考える必要があるでしょう。さらに、インターネット内での女性を蔑視する傾向にも気をつけなければなりません。アダルト関連はもとより、女性を商品ととらえ、玩具化するようなゲームが氾濫しています。しかも、今は誰もがそのようなサイトに容易にアクセスできる環境にあります。「インターネットは自由で対等な媒体」というものを裏返して考えれば、今までのアナログの生活よりも、信じられないくらい早くて、大量にどんな人へも広まってしまうのです。今までは手になかった、目に触れなかった人たちが、も無防備に伝わるということですから、情報の入手や発信することに関して、きちんと規制をかける手段を整えなければならぬでしょう。

エンパワーのステップの一つに、デジタル産業への職域拡大ということで、理系の女子学生を増やそうという動きもあります。

そうですね。それは結構なことだと思います。ただし、理系だからパソコンができる、文系だからダメだ、ということにはならないと思います。インターネットはあくまでもツールの一つであって、目的ではない。要は、その人の仕事への意欲とトレーニングの問題ではないでしょうか。

今後は、インターネットから派生する差別や人権に関して注視しつつ、何のために、どう使うのか、その目的や自分自身を確立し、賢くつきあっていくことが必要になってくるでしょう。



女性たちのために発信したいと ネット・コミュニティーづくり

非営利組織「WOM」は、ネット上の「コミュニティー」。

発足当時は少なかった保育園情報などを先駆けて発信、介護・在宅ワークなどのオンライン学習会や、世界に向けて英語に翻訳したホームページを作成するなど、インターネットならではの活動を行っている。

普段はほとんどメールで情報交換しているが、年に一、二度は集まり親睦を深めるという。仕事、子育てに目まぐるしい日々を送っている代表の隅田英子さん、永野美奈子さん（技術面担当）、本間玲子さん（会計）に話を聞いた。

発足は八年前

阪神淡路大震災があった一九九五年は、インターネットを使ってボランティア活動ができるのではないかと認識されてきた年でもある。その年、ネット上にボランティアの拠点を作ると実証研究プロジェクトVCOM（慶応大学大学院・金子郁容教授）の一つとして、女性のエンパワメントに貢献するネットワーク「WOM」が誕生した。

現在代表を務める隅田英子さんは、発足直後からのメンバーだ。彼女自身、子どもを育てながら仕事をするのが精神的に重荷になっていた時期で、非常に興味を持って「WOM」に入ったという。

「発足当時は六人くらい。そのころは一般の方も多くインターネットを始めた年で、高学歴で問題意識を持った女性がたくさん入ってきて、一番多いときで百人程の会員がいました」。年齢層は二十代から八十代まで幅広い。

一九九五年。
世界女性会議in
北京での出来事

北京会議があった一九九五年は、まだまだ今ほどインターネット接続に慣れていない時代だった。「WOM」の当時のメンバー三人が現地入りし、情報発信を行った。

メール送信やホームページ閲覧のサポートをしたり、ワークショップに参加した人からのレポートを代理で発信した。政府の見解とは別の一市民の意見が、新聞より早くホームページで読めたことは、世の中を驚かせた。

パソコンを
有効に活用して運営

隅田さんは、一年半程家族でイギリスに滞在したことがある。



「WOM」

Women's Online Media

インターネットを通して活動する非営利組織。原則として会員は女性に限定される。「インターネットと女性のエンパワーメント」をキーワードに、女性のための情報を学習・収集・提供する団体。1995年5月の発足以来、日本における女性向けサイトのパイオニアとして日英両語のホームページを運営している。「WOM」の企画は「この指とまれ方式」即ちホームページ作成、編集、調査リサーチ、翻訳などの活動はできるメンバーが自ら進んでやるという形式で行っている。現在会員は約30人。

■ WOMホームページURL (アドレス) <http://wom-jp.org/>



左から本間さん、隅田さん、永野さん

「海外では、日本の女性といえば芸者ガールというイメージが強く、社会の中で活躍している日本の女性がたくさんいるのにとがっかりしました」

このような経験からも、「WOM」では海外で日本の女性の現状を正しく理解してもらうため、英語で発信することを常に意識している。

国際的に活躍しているメンバーも多く、翻訳も着々と進む。日本の女性が置かれている状況を英語で伝えるサイトはまだ少ないため、海外からの問い合わせも何度か受けている。

会員同士の連絡はすべて電子メールで行い、総会もネットで行う。予算など質問を投げて承認を得ることを繰り返すため約一カ月かかるが、個人の時間を束縛せず全メンバー参加という利点がある。

全員が登録している*メーリングリスト(M)のほか、運営や広報、テーマ別分科会(子育て、仕事など五つ)のMがあり、それぞれが興味のある話題に積極的に発言していく。

「WOM」の決まり事に、「運営にかかわることはすべてMに載せる」というものがある。全員が同じレベルの情報を共有し、平等な関係を維持していくための重要な規則だ。

「WOM」では介護、在宅ワーク、保育園等をテーマにネット上での学習会も行った。期間を決めて外部の講師がレクチャー、それをメーリングリストに載せ、

質問はまたメールで受ける。「WOM」の立場はコーディネーター、家のパソコンを通して講義を受け意見交換できるのは、インターネットならではのメリットだ。

エンパワーメントの手段として

一市民の集まりである団体からの社会に向けた情報発信に、受けとる側からの反応もたくさん返ってくる。地域のセンターなどへは通える人が限定されるが、子育て中で家にいる人も社会活動に参加できるのはまさにITの力だ。十五年前には考えられなかった状況である。

「WOM」の活動を通して、普通だったら知り合えない人たちが業種・年齢・住む世界・活動範囲も違う人たちと出会い、情報交換する。会員一人ひとりが自分の意見を持つて活動していくことで力をつけていく。

女性が暮らしやすくなるために誕生した、自立した女性のネットワークの場「WOM」。情報を更新するために人手不足をどうするか、次の世代にどう引き継いでいくかがこれからの課題だ。

*メーリングリスト(M)

インターネットの電子メールの同報システム。Mアドレスにメールを出すとMに登録されているすべての人のアドレスにそのメールが同報され、情報共有ができる。